



大黒屋光太夫・磯吉画幅

当館蔵

春の企画展

「光太夫の里帰り

-大黒屋光太夫らの帰郷文書公開-

- 戦前の光太夫らの供養碑
- 亀屋の墓碑が追加指定に

春の企画展

「光太夫の里帰り-大黒屋光太夫らの帰郷文書公開-」

開催期間 2014年3月20日(水)～2014年7月13日(日)

ロシアから帰国後、幽閉状態を強いられていたと考えられていた大黒屋光太夫ですが、地元から発見された古文書によってふるさとに里帰りが許されていたことがわかりました。

春の企画展では、市指定文化財「大黒屋光太夫らの帰郷文書」を一挙に公開し、光太夫の里帰りの様子を紹介します。

\*市指定文化財「大黒屋光太夫らの帰郷文書」とは\*

大黒屋光太夫は、ロシアを体験して帰って来ましたが、鎖国をしていた江戸幕府によって幽閉されてしまった「悲劇の人」と考えられていました。光太夫の一生を描いた代表的な小説である井上靖の「おろしや国酔夢譚」も、その視点で描かれています。さらに、一緒に帰って来た磯吉は里がえりをしていることがわかっていましたが、光太夫に関しては里がえりの記録が見つかっていなかったために、「光太夫はふるさとの土を踏むことも許されなかった」ということが、なおさら「悲劇」として捉えられていました。

しかし、昭和61年8月、当時若松小学校の校長だった故・弓削弘氏が、若松小学校百年史を作成するために南若松の倉庫を調査し、たくさん古文書を発見したことで、事態は変化しました。その中には、大黒屋光太夫が故郷の鈴鹿に里がえりしていたことを示す内容の古文書が含まれていたのです。「光太夫が鈴鹿に里がえりしていた!」という事実の発見は、鈴鹿に光太夫ブームをおこしました。また、帰国後の光太夫の処遇をもう一度考え直す契機ともなりました。そして、その古文書は「大黒屋光太夫らの帰郷文書」と名づけられ、平成4年3月17日に鈴鹿市の文化財に指定されました。



大黒屋光太夫記念館  
こうだゆうくん

## 市指定史跡・大黒屋光太夫らの供養碑が修復されました。

大黒屋光太夫らの供養碑は、光太夫ら神昌丸乗組員が遭難し、行方不明になって2年後の三回忌にあたる天明4年12月に、荷主の長谷川家が若松東墓地に建立したものです。昭和61年3月27日に鈴鹿市指定文化財（史跡）に指定されました。

しかし、近年になって、経年の劣化がみられるようになってきましたので、平成25年度に修復が行われ、このたび原状に復されました。供養碑の所有者は東墓地運営委員会ですが、管理者である大黒屋光太夫顕彰会が修復の主体となり、市も補助をするかたちで参加しました。地衣類など表面に付着した汚れを取り除いたあと、石質強化材の塗布含浸を施し、亀裂に対してはエポキシ樹脂を流し込んで硬化させました。また、石材用撥水材の塗布も行いました。この修復によって、貴重な光太夫の史跡が未来へと命をつなぐことになりました。

さて、その供養碑ですが、江戸時代のころから「光太夫の供養碑」として遠方からも見物に訪れる名所だったようで、ときどき史料にでてきます。左にご紹介しているのは、戦前に撮影された供養碑の写真です。今後も変わらぬ姿で保存されることを願います。



戦前の供養碑

## 亀屋の墓碑が、市指定史跡・大黒屋光太夫らの供養碑に追加指定されました。

光太夫は、亀屋に生まれ、大黒屋へ養子に行ったという説が有力です。この墓碑は、光太夫の実家である亀屋（緑芳寺過去帳には南亀屋）の墓碑です。この墓碑が、平成二十六年4月23日付で、「大黒屋光太夫裏の供養碑」に追加指定されました。

この墓碑、もとは、南若松東墓地の南端にあり、昭和41年に亀屋の墓であることが確認されたものです。その後、市指定文化財・大黒屋光太夫らの供養碑とともに、東墓地の中央に移動され、整備されました。緑芳寺の過去帳によると、姉・国（妙伯）が天明5年8月11日に亡くなっていますが、国の法名は刻まれていませんので、墓碑の建立は天明4年4月から天明5年8月までに建立されたと考えられます。背面に8月15日とあるので、天明4年8月15日建立の可能性が高いでしょう。

光太夫の実家の墓碑であり、光太夫の戒名（釈久味）も刻まれていることから、地元に残る数少ない光太夫の史跡として貴重であり、また先に史跡指定されている大黒屋光太夫らの供養碑とともに墓地内に並べて整備されておりますので、光太夫の供養碑として追加指定されました。

